

## 日本中世禅林における『古文真宝』受容の様相

— 「秋風辞」注の「三韻一葉」「六韻一葉」をめぐる —

(国語教室・漢文学研究室) 太田 亨

## はじめに

『古文真宝』は、戦国時代から宋代までの代表的な詩文作品を選び集めた総集である。前集と後集から成り、前集には勸学文と各詩体の作品が収められ、後集には各文体の作品が収められる。中国よりもむしろ日本の方で多くの支持を得、特に鎌倉時代末から隆盛に向かう禅林において愛玩された。その高い支持の影響もあって、五山版として『魁本大字諸儒箋解古文真宝』が刊行されると、その受容にいつそう拍車がかかった。禅林では、前集よりも後集の方が需要が高く、後集については学僧の講義活動が頻繁に行われた。諸僧が行った講義は抄物として書き留められるようになり、後世に受け継がれ、現在でも多くの『古文真宝後集』の抄が存在する。

現存する多くの抄物には、所収作品に対して多くの禅僧がその解釈を示している。それらは今日においても有用な視座を提供している。こうした状況下にあつて、多くの禅僧が他の作品にも増して頭を悩ませ、熟考したにもかかわらず定まった解釈がなされていない箇所が存在する。本稿では、まずその作品の問題箇所を取り上げ、それに対して歴代の禅僧がどのように解釈したかを検討し、禅林における『古文真宝』受容の様相を見てみたい。

## 一、問題点の所在

『古文真宝後集』巻一に、漢の武帝が製した「秋風辞」が収められている。序によれば、武帝が河東郡に行幸し、地の神である后土を祀るに際し、途次に長安を顧みて群臣と宴会を始め、大いに興に乗って詠ったものであるという。作品を次に挙げる。

秋風起兮白雲飛、草木黃落兮雁南歸。

蘭有秀兮菊有芳、懷佳人兮不能忘。<sup>\*1</sup>(此三韻一葉。)

泛樓船兮濟汾河、橫中流兮揚素波。

簫鼓鳴兮發權歌。歡樂極兮哀情多。

少壯幾時兮奈老何。<sup>\*2</sup>(六韻一葉、錯雜成章。楚詞之体也。)

秋風起こりて白雲 飛び、草木 黄落して雁 南に帰る。蘭に秀有り 菊に芳有り、佳人を懐ひて忘るる能はず。樓船を泛べて汾河を濟り、中流に横たはりて素波を揚ぐ。簫鼓鳴りて權歌発す。歡樂極まりて哀情多し。少壯 幾時にぞ老を奈何せん。

秋風が吹き、白雲が飛び、草木は黄色に化して散り、雁は南に帰っていく。蘭の花が美しく咲き、菊が芳しい香りを漂わせ、あの美しい人が思い出されて忘れることができない。二階建ての船を浮かべて汾河を渡れば、船が中流に止まって白い波しぶきを上げていく。笛や太鼓の音が鳴り響き、舟歌を歌う声がかかる。楽しみ喜ぶことが極まると、悲しい気持ちが増してくる。若く意気盛んな時間はどれほどあろうか、我が身の老いるのをどうすることもできない。作品中の\*1印の箇所の注に「此三韻一葉。」(此れ三韻一葉なり。)とあり、

\*2印の箇所「六韻一葉、錯雜成章。楚詞之體也。」（六韻一葉にして、錯雜して章を成す。楚詞の体なり。）とある。この二箇所の注釈に対して、「三韻」がどの字を指すのか、「六韻」がどの字を指すのか、注の置かれた場所は適当であるのか等、多くの禅僧が疑問を呈し、様々な解釈を残している<sup>①</sup>。以下、歴代の禅僧の解釈を検討していく。

## 二、歴代の禅僧の解釈

歴代の禅僧の解釈を時代順に取り上げる。『古文真宝後集』に対する抄は比較的多数現存する。抄によって同じ禅僧でありながら抄文が異なる場合もあれば、また、同じ禅僧でも抄によって異なる解釈内容の抄文が引用されている場合もある。そのため典拠とした『古文真宝後集抄』の所在を引用前に明記する。（引用に際しては、仮名抄の場合や漢文抄でも訓点があつてある場合は書き下し文を施さない。なるべく原典のままを引用するが、他書と同抄と校勘し、訓点等を適宜補正した。）

### 〈仲方円伊〉

仲方圓伊（一三五四〜一四一三）は別号を懶室、懶団子という。乾峰士曇・友山士徳等に親炙し、その学芸を絶海中津より受ける。『古文真宝』を常に講抄し、「家学」としたことで知られる。ここでは、東京大学国語研究室に所蔵される『古文真宝後集抄』全十六冊（以下『東大十六冊本』と略称）に引用される抄を挙げる。

懶団子曰、三韻一葉、六韻一葉之注、古今学者不詳之。必注者、注此章之協韻、且設兩義矣。挙韻之數、曰三韻一葉、挙韻之字數、曰六韻一葉、當未一決之。時且双而存之。及下葉其三

韻一葉之注、而取六韻一葉之注、所其棄之注者、迷而滞在于上、所其取之注者、雖安在于本位、九字誤作六字也。我昔觀下注九韻一葉之本。以是識之云々。…略…

仲方は「三韻一葉」と「六韻一葉」の二つの注が古今の学者によって解明されていないことを言う。「秋風辞」の「協韻」（韻文で、響きが調和して韻を踏んでいるとすること。後世において韻が合わないとき、もとは押韻していたとすること。「叶韻」と同じ。）を注するに当たって、韻の数を挙げて「三韻一葉」という場合と、韻の字数を挙げて「六韻一葉」という場合があり、一つに定まっていない。「三韻一葉」の注は、迷って付けられたためここから削除すべきであり、「六韻一葉」の注は、本来の注される場所にあるため必要だが、「六」の字を「九」の字に改めるべきとする。その証拠に仲方は「九韻一葉」とある注釈本を見たことがあるという。

### 〈信仲以篤〉

信仲以篤（一三七七〜一四五二）は、東福寺永明院の中に宗鏡軒を再興したことから、別に宗鏡と呼ばれる。四六文に優れ、惟肖得巖・江西龍派と並称される。『古文真宝』の抄にその注釈をしばしば引用される。『東大十六冊本』の中でまず「三韻一葉」について次のように言う。

三韻一葉、信仲云、起ト飛ト帰ト三韻一葉也。叶韻ト云ハ、不レ論平仄、以三声之叶、為レ韻也。起之字ハ微韻二叶也。又義ニ、秀ト芳ト忘ト三韻一葉也。秀ノ字ハ、似レ不レ叶、以三詩ノ淇澳篇、見則叶也。猪ト磨トヲ叶用也。音ノ長シテ似タルヲ叶用也。詩曰、緑竹猗猗、有斐君子、如レ切如レ磋、如レ琢如レ磨云々。是ヲ以見ル時ハ叶也。猪ト磨トヲ叶用也。音長シテ似ルヲ叶用也。秀ノ字ハ仄ナレドモ長引ホドニ、叶三芳忘字也。「起」「飛」「帰」が三韻で叶韻である。その叶韻とは、平仄に関係なく、声

の調子が似ていることで韻とすることである。「起」は上声四紙韻に属するも、「飛」「帰」の上平五微韻に似ている。また「秀」「芳」「忘」も三韻で叶韻である。「秀」は声の調子が似ていないと言っても、『毛詩』の「淇澳」に「緑竹猗猗、有斐君子。如切如磋、如琢如磨。」（緑竹猗猗たり、斐たる君子有り。切するが如く磋するが如く、琢するが如く磨するが如し。）とある「猗」（上平四支・上声四紙）と「磨」（下平五歌）は音の長さが似ているため叶韻である。このことから「秀」（去声四九宥）も仄声であるが声の調子が長引き、「芳」「忘」（下平一〇陽）に似ていることから叶韻であるとするとする。

次いで「六韻一葉」について次のように言う。

六韻一葉ハ先達ノ曰、河波歌多何ト也。然レハ五韻ニテコソアレ、六韻ト云ハ不審也。或云、六可<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>五。或云、可<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>七。信仲ノ義ニハ、ヲクノ少壮幾時云々。幸ニ長句也。幾時之時ト云字ヲ入レテ見レバ、六韻也。又以<sub>二</sub>淇澳篇<sub>一</sub>見レバ、支韻ト歌ト叶ノ例アリ。猗ト陀ト詩ノ注ニツクル也。已上六韻一葉也。

「六韻一葉」は、「河」「波」「歌」「多」「何」が下平五「歌」に属し、「五韻」であれば問題ないが、「六韻」となっているため、先人はみな悩んでいるという。信仲は最後の句が長いと、「時」（上平四支）も叶韻であり、これを合わせて「六韻」とすれば良いとする。先の『毛詩』「淇澳」の「猗」（上平四支）と「磨」（下平五歌）の例が証拠となるとする。

#### 〈天英周賢〉

天英周賢（一四〇四〜一四六三）は、別号を玉林、または岐山という。学芸に秀で、瑞溪周鳳と親しかった。桂林徳昌によれば、天英が書き込んだ『古文真宝』の秘伝本があったようである。『東大十六冊本』の抄に、「或人私云、天英ノ云ク、黄落ノ落ノ字モ叶韻ゾト云ヘタソ。」と、天英の解釈自体は掲載

されていないが、「草木黄落分雁南帰」の「落」字も叶韻であるとする天英の指摘を引用している。

#### 〈清原業忠〉

清原業忠（一四〇九〜一四六七）は、清原家の儒字中興の祖と称され、宗業の子であり、良賢の孫にあたる。号を環翠軒、法名を常忠という。『古文真宝』の講抄を行っており、抄にしばしばその見解が出てくる。東洋文庫に所蔵される『古文真宝後集抄』十冊本（以下『東洋十冊本』と略称）は、天隠龍澤・月舟寿桂・彭叔守仙等の抄を集めて構成されている。その『東洋十冊本』に見える天隠の抄に業忠の解釈が次のように引用されている。

是ヲ外記常忠ニ問ヘハ、三韻一葉ヲ、落句注ニアルヘキヲ、上ニヲクハ、毛詩ニ此類アリ。ナン章ト、下ニアルヘキ事ヲ、上ニオクコト多也。ヨイ引事ト云ソ。サテ六韻ハ不知ト云フソ。

業忠は、「三韻一葉」は最後の句の注にあるべきであるのに、それより前の句に置かれるのは、『毛詩』によく見られる方法だとする。『毛詩』では詩が何章で構成されているか示すのに、末句に置かれるべきが、その前の句に置かれることが良くあるという。そうすると「六韻一葉」の注はなぜあるのか分からないとする。

別に叡山文庫に所蔵される『古文真宝彦龍抄』<sup>4</sup>には、彦龍周興が引く業忠の解釈として次のようにある。

又清三位ハ別ニ云ナル。三韻一葉トハ微歌陽ヲ叶ト見ヨ。毛詩中ニ詩之マシ中ニ叶也ト云字ヲ置処多シ。如此アル程ニ、不能忘之下ニ三韻一葉ト置タレトモ、只総ノコトヲ云タ也。サテ奥ノ六韻ハ六字誤リ。総シテ六字誤コト多也。六字ヲ九字ニ書タル本ヲ見タ。東坡詩ニモ九字ヲ六字ニ誤タルコトアリ。飛字カラ何字マデ九字叶也。三位毎度此コトヲ云ト也。古文真

宝ヲハ不読、講時如此云也。

ここでは「三韻一葉」だけでなく「六韻一葉」の解釈も提示している。業忠は、仲方の解釈にあるように、「六」が「九」とよく混同されていたことを取り上げ、蘇軾の詩にその例が見られることを言う。「九」字であるならば、「飛」「帰」「芳」「忘」「河」「波」「歌」「多」「何」の九字が叶韻であると解している。

〈華嶽建胃〉

華嶽建胃（？く一四七〇）は、別号を樵隱子、栗隱叟という。学芸に優れ、瑞溪周鳳と親密であった。笑雲清三が編集した『古文真宝後集抄』（以下『笑雲抄』と略称）において、桂林徳昌が引用する華嶽の逸話が次のようにある。

松云、或曰、六字誤也。蓋九字也。未見其摺。恵日、華岳和尚、一日書六作九之出処於片紙、寄長慶雲莊翁。翁遣曜侍者示之。余則紀之抄尾。丁亥、乱失之。吁、懶翁所觀、蓋此書歟。惜乎。

華嶽は、「六韻一葉」の「六」の字が「九」の字で誤りであり、「九」の字になつてゐる本を見たとき、その出処を示した手紙を雲莊徳慶に送つた。雲莊翁は曜侍者を遣わして自分（桂林）にその出処のメモを示してくれたため、それをしてしまったとある。「懶翁」は懶室、懶田子を指し、前掲の仲方円伊が見たとする書もそれかと推量している。

〈天隱龍澤〉

天隱龍澤（一四二二く一五〇〇）は、別号を黙雲という。学芸を惟肖得巖・瑞溪周鳳から受ける。『東洋十冊本』に次のようにある。

天、三韻一葉ハ、三ノ字ハ二ノ字歟。微ノ韻ト歌韻トヲ云ソ。一説ニ、只三韻ニテ、奈老何、注ニアルヘシト云ソ。イヤサテモナイ、末句注ニアル

ヘケレトモ、先只上ニヲイタソ。総ノ韻ヲ三韻ト云ソ。六韻一葉ハ何事ソ。泛樓船ノ句カヲレハ五韻也。然則六ノ字ヲ五トナラスヘシ。仲芳曰、此字カ不審サニ、唐本ヲ見レハ、九韻一葉トアルソ。ソレテハヤスイ。総ノ韻カチャウト九韻也。是ヲ外記常忠ニ問ヘハ、…（上述の清原業忠の解釈を引用）…

「三韻一葉」について、「三」の字は「二」の字で、「二韻は上平五微韻（「飛」「帰」と下平五歌韻（「河」「波」「歌」「多」「何」）のことを指す。一説によれば「三韻」として、末句の注にあるべきところ、一つ前の韻の句末にその注を置いてしまったとする。この解釈は清原業忠の説の影響であろう。そして、「秋風辞」は全体で三韻であるのに、「六韻一葉」とあるのはなぜか。「泛樓船」の句から見ると、「河」「波」「歌」「多」「何」の五韻である。そのため、「六」の字を「五」の字に直す必要がある。仲方の「九」字に改めるべきという説を業忠に尋ねているが、業忠は上述のように分からないとする。

〈了庵桂悟〉

了庵桂悟（一四二五く一五一四）は、はじめ道号を桃溪といったが、土御門天皇より室号の了庵を授かり、道号に転用した。別号を鉢袋子、地名を伊川という。『笑雲抄』の一元抄に引用される了庵の解釈が次のようにある。

一抄云、文明十七乙巳仲冬十三日、了庵和尚降臨予奉行寮、話次以秋風辞三韻一葉六韻一葉。和尚ノ義ニ曰ク、前之三韻一葉ハ、三韻ナレトモ一葉ニシテ、河ノ字ヲバ結前生後ノ字ノ韻ニシテ、サテ、河ノ字マテヲ三韻ニシテ、又河ノ字カラ、波歌多何ノ此五字ヲ添ヘテ、前ノ三韻一葉ヲハ一韻ニ取り合セテ、六ニ取ツテ六韻一葉トスヘキ歟ゾ。以上ヲ挙ゲテ六韻一葉、錯雑成章ト云フカゾ。

文明十七年（一四八五）十一月十三日に、了庵が一元に「三韻一葉」と「六韻

「一」の解釈を示している。これによると、三韻は「飛」「帰」の一韻と「芳」「忘」の一韻、そして「河」の一韻までを合わせ教えて三韻とする。そして、それらが叶韻（協韻）であることから、「飛」「帰」「芳」「忘」「河」を一韻として考え、さらに「河」「波」「歌」「多」「何」の五韻を合わせて「六韻一葉」とする。

#### 〈桂林徳昌〉

桂林徳昌（一四二八？）は、別号を薺園、青松という。天隱竜沢、清原業忠等と親交があった。『古文真宝』に造詣が深く、幾度もその講義を行った。一元光演はその講義を聴く。

ここでは、『笑雲抄』を取り上げるが、まず「何晦夫古今文鑑句解」云、前四句、係二兩句ニ換レ韻。後、五句、係二同音ニ協韻。自成ニ一體也。同云、此篇、句語不レ多而意在二言外一。以二万乗之君一、得レ詩人吟詠之趣一、其可レ愛也矣。同云、武帝処ニ富貴之中一。乃、因ニ少壯ニ而思レ老之將ニ至一。況、他人乎。」に対して次のように抄する。

松云、或云、晦夫唯、以為、此篇用ニ微陽唐歌三韻ノ字ニ作レ叶。殊、不レ知下起秀船三字、亦為ニ中、叶韻上。其證見ニ于此篇三韻一葉、六韻一葉之注。覽者可レ考レ之云。非ニ愚之所ニ取也。又或云、若、以ニ微陽唐歌一為ニ一葉一、何三韻一葉。四字在ニ陽唐下、挟、在ニ中間。又六韻一葉、亦不レ合也。

桂林は、「微」「陽・唐」「歌」韻の三韻で協韻とするだけでなく、作品中の「起」「秀」「船」の三字も協韻であることを指摘し、考えるべきとするが、この説を採用していない。そして、「微」「陽・唐」「歌」韻の三韻で協韻とするならば、ここで「三韻一葉」という理由が分からないとし、その理由として、この注が陽韻（「芳」）・唐韻（「忘」）の下にあり、歌韻を含まず、その中間に置かれていることを挙げる。また「六韻一葉」もその数が合わないとする。

次いで『笑雲抄』では、「六韻一葉」の桂林抄を次のように引用する。

松云、懶因子（建仁伊仲峯）曰、…（先に挙げた仲方の抄を引用）…。余侍レ凡ニ之日、聞ニ此談一、而不レ聽レ水矣。其所レ棄一之注、雖ニ迷而、在ニ上、猶、不レ失ニ三韻一葉之理一。是、莊舄病ニ于楚一而越吟者也。其所レ取之注、雖、安ニ在本位一、九韻一葉之九、字誤、作ニ六、字。故、學者茫昧而不レ識ニ其理一、是後漢夏馥逢ニ党錮禍一、剪レ鬚、為ニ治家備一。形容容、而兄弟尚、不レ識者也。嗚呼、人亦、不レ慎ニ於出処一、不レ一ニ於始終一、亦有ニ此、患一矣。

松云、或曰、六、字、誤也。…（先に挙げた華嶽の逸話を引用）…。或者又曰、九六、兩字、往々訛謬。坡集第一、又日本、本作ニ六月二十日夜渡レ海。唐本作ニ九月二十日一。然、則九六之參差、從來有レ之歟。愚云、韓文諺、鷓冠子ニ云、鷓冠子十有六篇。考異、六、作レ九。注、云、九、方、作レ六。今、鷓冠子自ニ博選、至ニ武靈王問一、凡、十九篇、此、只云二十六篇。未、詳。愚、又引レ之、為ニ九六之證ニ云々。松云、私云、何晦夫句解、無ニ三韻一葉六韻一葉之注一。

桂林は、学問に励んでいた頃、仲方の解釈を聞いてもその是非について十分に判断することができなかった。「三韻一葉」が置かれる場所を間違っているその理を失っていないのは、越人の莊舄が楚に仕えながらも越のことを思つて越の歌を歌つたことと同様であり、「六韻一葉」が本来の場所にありながらも「九韻一葉」とするべきであることを学者が知らないのは、夏馥が党錮の禍に遭つたため、姿をくらまして容貌を変えたと誰も気が付かなかったことと同様である。人も出処進退を慎まず、終始一貫でないと、この患いを有することになると、仲方の解釈について喩えを用いて分かりやすく補足説明している。

次いで、「九」と「六」の誤用がしばしば起こることの例を挙げる。唐本の蘇軾集の卷一に「九月二十日夜渡海」が収められているが、「六月二十日夜渡海」の誤りだという。さらに『新刊五百家註音弁昌黎先生文集』卷十一「謠鷓

冠子」に、「鷓冠子十有六篇」とあるが、朱熹の考異によれば「十有九篇」の誤りだといふ。このように「九」と「六」は書き誤ることが多く、「六韻一葉」と「九韻一葉」の誤りだとする。

桂林は、『古文真宝』を複数回講義したようであるが、講義以外でも『古文真宝』について談義することがあった様子である。『笑雲抄』の一元光演は次のように言う。

然レドモ又不審アルゾ。六韻一葉ノ下ニ錯雜成章ノ四字ヲバ、何トスベキゾ。コレニツイテ松云、後篇ノ漁父辞ノ韻ガ叶韻デ錯雜シテ章ヲ成シタ者ゾ。ナゼニナレバ、一番ガ庚韻デ、清ト醒トガ一韻。二番ガ支韻デ、移ト醜トガ一韻。三番ガ衣インノ音デ汝ト衣トガ一韻。四番ガ白ト埃ト一韻。埃モクハクノ音ゾ。五番ガ又庚韻デ、清ト纓ト一韻。六番ガ濁ト足トガ一韻デ、合セテ六韻ゾ。コノ時ハ座牌カ違フゾ。アソコノ上ノ六韻一葉、錯雜成章ノ八字ハ、コノ漁父辞ノ末ノ注ニ置イタラバ然ルベキ歟ト、松ノ仰セラレタゾ。サテ上ノ三韻一葉ヲバ、六韻一葉ノ座敷ニヲキタラバ、然ルベキ歟ゾ。然レドモ、結前生後ナドノツレテ此様ナ事モイクラモ有ルゾ。今ココニ書スルハ、講以後、松象駕ヲ余ガ南榮ニ枉ゲラレシ時、此問アリ。文明十四寅、夏五月日。

文明十四年（一四八二）五月、桂林徳昌が一元のいる南榮に寄つた際に示された解釈である。この時の解釈によると、「三韻一葉」の注が「秋風辞」の末句に置かれ、「六韻一葉」の注が次の作品である「漁父辞」の末に置かれるべきという。「漁父辞」を「六韻」と考える場合、一・庚韻の「清」「醒」、二・支韻の「移」「醜」、三・衣韻の「汝」「衣」、四・「白」「埃」、五・庚韻の「清」「纓」、六・「濁」「足」となる。

（正宗竜統）

正宗竜統（一四二八〜一四九八）は、別号を蕭庵、秃尾という。学問を瑞巖竜惺・江西竜派に受ける。『古文真宝』の講義を幾度も行つていたようであり、常庵龍崇や河清祖瀏がその講義を聴いていた。ここでは『東大十六冊本』の抄を見てみる。

常庵、云、蕭老師、義、飛、字一韻、帰、字一韻也。芳忘、二字、ハヒフヘホノ時為二韻也。総合、為三韻、故云三韻一葉也。河、字歌、字何、字為二韻。カキクケコノ故也。前、三韻加レ之、為四韻也。波、字為二韻、多、字為二韻、加此二韻、為六韻一葉也。河清聞、諸、蕭庵云、芳忘、二字、同韻ニテ、ハヒフヘホノ時、与飛帰、二韻、是同韻也。飛、字帰、字、為二韻、芳忘、為一韻。是三韻一葉也。而此、飛帰芳忘、四字之内、抽一字、撰于下、五韻、是為六韻一葉也。或曰、芳忘、二字、悉曇之時、大異也。下ノ五韻ニ撰スルナラバ、忘ノ字ヲ下ヘトルベキ歟。又常庵、話云、靈源老漢、講云、三韻一葉、謂飛、字芳、字忘、字也。ハヒフヘホノ相通也。除帰、字。故謂之三韻。又六韻一葉、謂帰、字河、字波、字歌、字多、字何、字也。カキクケコノ相通也。故云、注、錯雜成章。蓋楚辞、多此体也。此義不分明、以前說、蕭老師之義、為可也。

正宗の解釈は講義の度に異なつていた可能性が存する。常庵龍崇が聞いた正宗の解釈として、始めに引用される解釈は、「飛」の字と「帰」の字をそれぞれ一韻とみなして二韻とし、「芳」と「忘」の二字を二韻とみなし、合わせて「三韻一葉」とする。そして、「河」と「歌」と「何」が力行音に関連して通じるため三字を一韻とみなし、さらに「波」の字を一韻、「多」の字を一韻とみなし、合わせて六韻一葉とする。

次いで河清祖瀏が正宗に質問したところ、その答えとして、「飛」の字と「帰」

の字をそれぞれ一韻とみなして二韻とし、「芳」と「忘」の二字を一韻とみなし、合わせて「三韻一葉」とするのは上述と同じであるが、「忘」字を下の「河」「波」「歌」「多」「何」の五字と合わせて六韻一葉とする解釈は、上述の解釈とは異なる。

また別に常庵が聞いた正宗の解釈としては、「飛」「芳」「忘」がハヒフヘホに関連して通じるため、三字を「三韻一葉」とし、「帰」「河」「波」「歌」「多」「何」がカキクケコに関連して通じるため、六字を六韻一葉とする。

また『東大十六冊本』では上述の箇所とは異なる箇所に、次の正宗の解釈を引用する。

注、六韻一葉、正宗ノ義ニ、飛ト帰ト一韻、芳ト忘ト一韻、河一韻、波一韻、多一韻、歌ト何ト一韻。合六韻一葉也。ココノ注ニ錯雑ト云ハ、河ト歌ト何トハ、カキクケコ通也。河ノ字ノ下ニ、通セヌ波ノ字アリ。歌ノ下ニ多ノ字ヲ用ルホドニ、歌ノ一韻ト云ヘドモ、通字ト三不レ通字トヲ、ウチマゼテ韻ヲフンダ処ヲ、錯雑ト云也。楚辞之躰也トハ、楚辞ニノセタルホドノ辞ニハ、如レ此錯雑成ニ文章ト云心也。此秋風辞モ楚辞ノ後語ノ第二ニノセタゾ。

ここでは、「飛」「帰」を一韻、「芳」「忘」を一韻、「河」を一韻、「波」を一韻、「多」を一韻、「歌」「何」を一韻として、合わせて六韻一葉にする。そして「錯雑成章」の説明として、「河」「歌」「何」はカキクケコに関連して通じるのに、「河」の次に「波」が置かれ、「歌」の下に「多」が置かれ、通じる字と通じない字が混合して韻を踏んでいるからとする。「錯雑」とは韻の用いられ方が混合していることだと解している。

#### 〈祖溪徳濬〉

祖溪徳濬（生没年未詳）は別号を水拙、鶴峰という。その学芸は天隠竜沢か

ら学んだ。『古文真宝』の講抄が『東洋十冊本』に引用されている。

祖、三韻一葉ハ、此韻ハ三アルソ。此三ハ叶韻ソ。六韻一葉ハ何ソ。起字秀字船字芳字カ通ソ。六韻一葉是也。此義ハワルイソ。東坡詩ニモ六字九字カマキレル間、六ノ字ハ九韻一葉ソ。此義モ知ラヌ事ソ。三韻一葉ニモカサナルソ。一義ニ六韻一葉ハ、漁父辞ノ下ニアランソ。卒忽ニココニヲイタソ。ソレハ合タレトモシラヌ事ソ。漁父辞ヲ楚辞ノ体ト云ハ、ランテモナイコトソ。

祖溪は、「秋風辞」が三つの韻（微韻・陽韻・歌韻）によって成立しているの  
で、「三」は理解できるとする。「六韻一葉」について、「起」（紙韻）「秀」（有韻）「船」（先仙韻）「芳」（陽唐韻）字を数えることで「六」に通じるとするが、この説を否定する。また、「六」字と「九」字の混同についても妥当か分らないとする。そして、「六韻一葉」は、本来「漁父辞」にあるべき注だとし、間違つて「秋風辞」の注に置いてしまったとする。この説は韻を照らし合わせてみると合致するが、それでよいか不安を残している。祖溪は歴代の僧の解釈を含めて、「六韻一葉」に対する納得のいく解釈ができなかったようである。

#### 〈万里集九〉

万里集九（一四二八？）は別号を梅庵、椿岩と言ひ、庵名を梅花無尺蔵という。その学芸は雲章一慶等より授けられた。『古文真宝』を始め、『三体詩』や蘇詩・黄詩の講義を行った。ここでは『東大十六冊本』の抄を見てみる。

又飛帰芳之三韻一葉、若以順論之、則三韻一葉之注、可置芳字之下。陽唐之韻、通微與歌。故下注云、六韻一葉、忘河波歌多何之六韻一葉也。凡以三韻一葉、六韻一葉、為不審、先輩之異說甚多。今独取前義為正矣。且又以悉曇言、則芳之叶三微之韻、忘之

叶<sub>二</sub>歌之韻<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>疑焉。毛詩<sub>ニ</sub>亦有<sub>レ</sub>之。三韻一<sub>レ</sub>叶、六韻一<sub>レ</sub>叶、文選<sub>ノ</sub>注<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>之也。

万里は、「三韻一<sub>レ</sub>叶」の注は「芳」の字の下に置くべきだとする。その理由として陽唐韻（「芳」「忘」）が微韻（「飛」「帰」）と歌韻（「河」「波」「歌」「多」「何」）に通じるためだとする。それによつて「飛」「帰」と「芳」を合わせて「三韻一<sub>レ</sub>叶」、「忘」と「河」「波」「歌」「多」「何」を合わせて「六韻一<sub>レ</sub>叶」が成立するという。この二注に関する解釈は多々存するが、悉曇（梵字の字母とそれが表す音声）に照らし合わせても疑う余地がないとする。

また万里は次の例証も取り上げている。

文選廿九、古詩十九首、（無<sub>二</sub>作者<sub>一</sub>名。或云<sub>二</sub>枚乘<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>実拠<sub>一</sub>。）第八首云、冉冉孤生竹、結<sub>二</sub>根泰山<sub>一</sub>阿、與<sub>レ</sub>君為<sub>二</sub>新婚<sub>一</sub>、免<sub>二</sub>絲附<sub>一</sub>女蘿、免<sub>二</sub>絲生<sub>一</sub>有時、夫婦會有<sub>レ</sub>宜、千里遠<sub>レ</sub>結<sub>二</sub>婚<sub>一</sub>、悠悠隔<sub>二</sub>山阿<sub>一</sub>。思<sub>レ</sub>君令<sub>レ</sub>人老、軒車來<sub>レ</sub>何遲、傷<sub>レ</sub>彼蕙蘭花、含<sub>レ</sub>英揚<sub>レ</sub>光輝、過<sub>レ</sub>時而不<sub>レ</sub>采、將<sub>レ</sub>隨<sub>二</sub>秋草<sub>一</sub>萎<sub>上</sub>、君亮執<sub>二</sub>高節<sub>一</sub>、賤妾亦何為。某謂、此<sub>ノ</sub>全篇、歌支微<sub>ノ</sub>三韻一<sub>レ</sub>叶、押<sub>レ</sub>之。雖<sub>レ</sub>欠<sub>二</sub>陽韻<sub>一</sub>、歌<sub>ノ</sub>与<sub>レ</sub>微叶韻、可<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>之也。

『文選』二十九に収められる「古詩十九首其八」において、陽韻は含まれないが、歌韻と支韻と微韻が協韻となつてゐることをいう。この「古詩十九首其八」について、月溪聖澄は次のように解説する。

澄私考<sub>二</sub>右韻<sub>一</sub>字。阿夢、此二字ハ歌韻。宜阿遲、此三字ハ支ノ韻。輝、此一字ハ微韻。萎為、此二字ハ又支ノ韻。

月溪は「阿」「夢」が歌韻、「宜」「阿」「遲」が支韻、「輝」が微韻、「萎」「為」が支韻であるとし、この三韻が協韻であることを補足説明している。

（鸞岡省佐）

鸞岡省佐（？〜一五二三）は、はじめ鸞岡瑞佐という。別に「東樵」と号す

る。『実隆公記』では、相国寺常德院万松軒で『古文真宝』の講義をし、『古文真宝不審』（尊経閣文庫所蔵）では、正徳七年（一五一二）六月二日、彼地に渡つて明人・祝允明に「秋風辞」の二注について尋ねている。

漢武秋風辞注云、三韻一<sub>レ</sub>叶。後又云、六韻一<sub>レ</sub>叶。我地之学者甚怪之曰、前三韻一<sub>レ</sub>叶之語亦可怪之。雖然此注、相兼前後而言之歟。後又六韻之字可怪之。再兼前後而言之、則或可言三韻一<sub>レ</sub>叶、或可言九韻一<sub>レ</sub>叶也。有人曰、曾見古本作九韻。又有人強作義曰、後六韻一<sub>レ</sub>叶之語、蓋以少壯幾時之時字為一韻、而為六韻也。不知拋何義哉。想是字誤歟。

（明人答）只是注刻之誤。楚詞之体、多少句、皆不拘。此注出於書、枋細人所為。不必疑、只是誤耳。

漢武「秋風辞」の注に云ふ、三韻一<sub>レ</sub>叶、と。後に又た云ふ、六韻一<sub>レ</sub>叶、と。我地の学者甚だ之を怪しみて曰く、前の三韻一<sub>レ</sub>叶の語も亦た之を怪しむべし。然りと雖も此の注は、前後を相ひ兼ねて之を言ふか。後の又た六韻の字も之を怪しむべし。再び前後を兼ねて之を言ひ、則ち或ひは三韻一<sub>レ</sub>叶と言ふべく、或ひは九韻一<sub>レ</sub>叶と言ふべきなり、と。人有りて曰く、曾て古本を見るに九韻と作す、と。又た人有りて強ひて義を作して曰く、後の六韻一<sub>レ</sub>叶の語は、蓋し少壯幾時の時の字を以て一韻と為し、六韻と為すなり、と。何れの義に拠るかを知らず。想ふに是れ字の誤りか、と。

（明人答）只だ是れ注刻の誤りなり。楚詞の体、多少の句、皆な拘はらず。此の注の書に出づるは、細人の為す所を怗む。必ずしも疑はず、只だ是れ誤りなるのみ、と。

鸞岡は二つの注が日本において甚だ不可解とされ怪しまれてゐるという。そして「三韻」が前後の文章を兼ねてゐるのではないか、また「六韻」とあるが、ここでも前後の文章を兼ねて「三韻一<sub>レ</sub>叶」もしくは「九韻一<sub>レ</sub>叶」とするのが良いのではないかとする。ある人は、古本に「九韻」となつていたので見たと言



い、ある人は「少壯幾時」の「時」字も韻に加えて「六韻」と無理強いて解するのが良いと言う。一体何れの解釈に拠ればよいのか分からない。思うにこれは字の誤りなのだろうか、と尋ねる。

この鸞岡の質問に対して、明人の祝先生は、この注はただの誤刻である。楚詞の体についても、多少の句についても、全て関わりがない。この注が書に表れたことについては、細かな点を詮索する人が行ったことを忌むことである。必ずしも疑う必要はなく、ただ誤ったにすぎない、と答えている。

鸞岡の質問において、前注を「三韻一葉」と考えるのは、「飛」「帰」（上平声微音）の一韻と、「芳」「忘」（下平声陽韻）の一韻と、「河」「波」「歌」「多」「老」（下平声歌韻）の一韻の三韻が叶韻であると考えからであり、後注を「九韻一葉」とするのは、九字それぞれが叶韻であると考えからである。次いで、鸞岡は納得の回答を得るため、再度質問する。

（東樵）某在日本国日、常謂同胞曰、是板刻之誤、有何疑。然而或有不信之者。故今日就先生決之、如合符、不堪歡喜者也。只疑此六韻之六字也。

（明人）前注當云、以上皆二韻一葉。後注當云、五句一韻一葉。

（東樵）某日本国に在りし日、常に同胞に謂ひて曰く、是れ板刻の誤りなれば、何の疑ひか有らん、と。然而れども或いは之を信ぜざる者有り。故に今日先生に就きて之を決するに、符を合するが如く、歡喜に堪へざる者なり。只だ疑ふらくは此の六韻の六の字なり、と。

（明人）前注は當に以上皆な二韻一葉と云ふべし。後注は當に五句一韻一葉と云ふべし、と。

鸞岡は、私は日本でいつも仲間、これは板刻の誤りであるので、何ら疑うことはない、と言っていたが、信じない者も中には存した。そのため、今日先生に聞いて日本での状況に決着を付けることができ、事の彼此が合致し、喜びに耐えないが、ただやはり「六韻」の「六」の字については疑問である、という。

鸞岡の疑問について、祝先生は、「三韻一葉」については、「以上二韻一葉」と言うべきであり、「六韻一葉」については、「五句一韻一葉」と言うべきである、と答えている。つまり、「飛」「帰」（上平声微音）の二韻が叶韻、「芳」「忘」（下平声陽韻）の二韻が叶韻であり、「河」「波」「歌」「多」「老」（下平声歌韻）の五字が一つの韻で叶韻であると考えている。

（一元光演）

一元光演（生没年未詳）は、桂林徳昌の『古文真宝』の講義を聴き、京都大学に所蔵される『古文真宝抄』の奥書には、「此抄者、一元和尚就桂林和尚所聽之聽書也。写以為吾家真宝云。永正十五年戊寅三月廿六日清三志。」（此の抄は、一元和尚の桂林和尚に就きて聴きし所の聽書なり。写して以て吾が家の真宝と為すと云ふ。永正十五年戊寅三月廿六日清三志。）とある。一元の『古文真宝』解釈は全般的に桂林からの影響が強いようである。「三韻一葉」について『笑雲抄』で次のように言う。

一抄云、三韻一葉ハ初ノ微韻、次ノ陽韻、歌韻ゾ。此三韻カ叶韻ゾ。毛詩七月ノ詩ニ見エタゾ。又北山詩ニ支韻ト通ズルゾ。三韻一葉ハカクノ如キゾ。叶ハ莫悲ノ反。

三韻について、微韻（「飛」「帰」と陽韻（「芳」「忘」と歌韻（「河」「波」「歌」「多」「何」とする。

次いで「六韻一葉」について、一元の抄は諸説の抄を仮名抄に置き換えて次のように言う。

一抄云、六韻一葉、是ハ古今心得ヌコトゾ。結句、錯一楚辭一ナリト云フカ、何ト云フ事ゾ。サテコノ真宝ハ仲峯ノ家学デ有ルガ、…（仲方の説を引用）…又一義ニ六韻一葉ハ起秀船支賜歌トカ通ソ。…（桂林が取り上げた説を引用）…

又云、三韻一葉六韻一葉ハ、古今不審ナ事ゾ。先ヅ一義ニ微ト陽ト歌トノ三ヲ三韻一葉ニ取ゾ。…（桂林が取り上げた説を引用）…。然レドモ又不審アルゾ。六韻一葉ノ下ニ錯雜成章ノ四字ヲバ、何トスベキゾ。コレニツイテ松云、…（桂林が取り上げた説を引用）…。  
一抄云、宗鏡云、三韻一葉ハ起ト飛ト帰ト三韻デ一葉也。…（信仲の説を引用）…。

一抄又云、文明十七乙巳仲冬十三日了庵和尚降臨シテ、予奉行寮話次、以秋風辞三韻一葉六韻一葉。…（了庵の説を引用）…。  
一元の抄は、桂林徳昌から聞いた解釈を仮名抄で書き記しているのが特徴である。

〈湖月信鏡〉

湖月信鏡（？く一五三五）は、別号を蓑庵、楠溪という。『古文真宝』『三体詩』『論語』等の講義を行い、それらの抄が現存する。ここでは『笑雲抄』に引用される抄を取り上げるが、上述の諸僧の説をただ仮名抄に改めた場合は、適宜省略する。

湖云、六韻一葉錯雜成章―、錯雜―ト云ハ、韻ヲ三韻カヘタ処ヲ云ゾ。三韻一葉ハ古文真宝ノ大事ゾ。先ヅ叶韻ト云事ガ、心得難キ事ゾ。山谷詩ノ注ニモ任洲ガ不心得ゾトシテ置タゾ。各別ノ韻ガ倚合テ、音ノ叶タヲ云ゾ。信仲和尚ノ義ガ詳也。青松和尚ノ義云、…（桂林等の説を引用）…。

湖月は、「秋風辞」の注「三韻一葉」が『古文真宝』の中で重要であるとし、「叶韻」の意義が心得難いとする。その「叶韻」の解説については信仲の解説を参考にするように言い、「三韻一葉」と「六韻一葉」については、桂林徳昌の解釈を仮名抄でわかりやすく解説している。特に桂林からの影響が強かったようである。

〈彦龍周興〉

彦龍周興（一四五八―一四九一）は別号を半陶子。学芸を月翁周鏡・横川景三・桃源瑞仙等から受ける。叢林の奇才と称され、叡山文庫に『古文真宝彦龍抄』が残されている。

注二三韻一葉トアリ。ナントシタ注ゾ。叶トハ別韻ノ字ヲ通ヲ云ゾ。譬ハ東韻ヘ魚韻ナントノ字ヲ使ヲ云。然ハ微韻ト陽唐ト叶也。二韻一葉ト云ヘキニ、毎本三字也。古今不審ナリ。末之注ニモ六韻一葉トアリ。此レモ五字アルヲ、六韻ト云也。竺仙和尚秘事ニ仰ラレタコトアリ。論語序ヲ読ニ、後ヲ四五クダリ取テ、前ヘ持テ并テヨムコト相傳之説也。史記序モ如此ヨム。以レ是見レハ、菊有芳之下ニ此注ヲ可置。蘭有―マテ秋景ヲ云ホトニ、此下ナルヘシ。然ハ叶字ノ意ストスム也。飛帰芳三韻一葉也。忘字ヨリ末之何字マテ、六韻一葉ノ理モスム也。其謂ハ錯雜成章也。微韻中ヘ芳字入カ錯雜、又歌韻中ヘ忘字入カ錯雜也。前ノ注ニ三易韻トアルカ、微歌陽三韻也。錯雜成章ハ一章中ニ三韻叶也。又清三位ハ別ニ云ナル。…（清原業忠の説を引用）…。シツタンヲ云ヘハ、歌モ陽モ微モ通也。

「叶」とは別の韻が通じることと言い、ここでは微韻（「飛」「帰」）と陽唐韻（「芳」「忘」）が「叶韻」となるはずであるが、「二韻」ではなく「三韻」となっている。末の注も五字が韻を踏んでいるのに「六韻」となっている。これに対して竺仙梵僊が、論語の序では後の文章内容をそれよりも前で述べるべきであり、史記の序も同傾向があると述べた例を挙げる。そのことをも考慮すると、「三韻一葉」は「菊有芳」の下にあるべきであり、そうすれば「芳」までが三韻で微韻と陽韻が錯雜し、「忘」以下が六韻で陽唐韻と歌韻が錯雜し、題注の「凡三易韻」とある注も無理なく解釈できるといふ。これは万里の解釈とほぼ同内容である。

〈笑雲清三〉

笑雲清三（生没年未詳）は、外学に通じた僧として知られる。万里集九に従学した。歴代の抄を編集し、自らの抄も兼ね行うことに長けていた。天文三年（一五三四）には歴代の僧による蘇軾の詩の抄を編集して『四河入海』、大永五年（一五二五）に歴代の僧による『古文真宝後集』の抄を編集した。『笑雲抄』は、万里集九・桂林徳昌・一元光演・湖月信鏡の抄を編集し、それに自身の抄を加えた書である。笑雲は「三韻一葉」注について、次のように言う。

三謂、注ニ圈ヲシタ処ハ、皆林以正ガ我注ト見タゾ。注者ノ名アルハ、其人ノ注ヲ引イテ、林カ載セタゾ。ソノ外、注者ノ名ナキハ、大略文選ノ注ゾ。ソレヲ林ガソコソコノ下ニ入タゾ。次下モ之ニ效ヘ。

ここでは、『古文真宝』に収められる作品の注について、誰が注したのか解説している。当所「三韻一葉」については圈（丸印）が付された注なので、林以正の注ということになる。

万里・桂林・一元・湖月の抄を編集した後に、次の抄を付加している。

三云、東坡元豐二年巳未、四十四歳、八月十八日赴<sub>レ</sub>御史臺<sub>ニ</sub>。同十二月二十九日、實授<sub>ニ</sub>檢校尚書水部員外郎<sub>ト</sub>。三蘇年譜<sub>ニ</sub>作<sub>ニ</sub>二十九日<sub>ト</sub>。施宿年譜<sub>ニ</sub>作<sub>ニ</sub>二十六日<sub>ト</sub>。是亦九六参差之證也。又白樂天<sub>ノ</sub>詩<sub>ニ</sub>云、綠浪東西南北、水、紅欄三百六十橋。勝覽<sub>ニ</sub>、蘇州<sub>ノ</sub>部<sub>ニ</sub>引<sub>ニ</sub>是詩<sub>ト</sub>、作<sub>ニ</sub>三百九十橋<sub>ト</sub>。是亦九六参差之證也。九六参差之證有<sub>レ</sub>四、見<sub>ニ</sub>于前<sub>ニ</sub>也。

ここでは、「九」と「六」がよく混同される例として、蘇軾の年譜と白居易の詩を取り上げている。笑雲は「六韻一葉」が「九韻一葉」の誤りだとする説を支持していたのであろう。

〈月舟寿桂〉

月舟寿桂（一四七〇～一五三三）は別号を幻雲と言ひ、一華和尚とも称する。学芸を天隱竜沢・正宗竜統から受ける。月舟の『古文真宝後集』の抄は、『東洋十冊本』に複数の抄者の一人の抄として収められている。その月舟の抄は、歴代の抄を順次示しながら、自身の見解がある場合はそれを示している。

幻、晦夫前四句係兩韻換韻、後五句同韻協韻、自成一軌。…（桂林の抄を引用）…。幻雲按、新增補注古文大全、作六韻一葉、与此注同矣。私云、何晦夫句解無三韻一葉、六韻一葉之注。古賦辯對秋風辭注、改三韻一葉之三作二、改六韻一葉之六作五也。泛樓船之上<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>圈。幻未見古賦辯對、或本書之。可考。

幻、晦夫前四句兩韻に係りて韻を換へ、後の五句同韻にして韻に協ひ、自ら一軌を成す。…（桂林の抄を引用）…。幻雲按ずるに、新增補注古文大全は、六韻一葉と作し、此の注と同じ。私云ふ、何晦夫の句解に三韻一葉、六韻一葉の注無し。古賦辯對の秋風辭の注に、三韻一葉の三を改めて二と作し、六韻一葉の六を改めて五と作すなり。泛樓船の上に圈有り。幻未だ古賦辯對を見ず、或本之を書す。考ふべし。

何晦夫の『古文句解』の注を挙げた後、桂林の複数の解釈を引用する。そして、『新增補注古文大全』には同様の「六韻一葉」の注が存在し、『古賦辯對』の「秋風辭」には「三韻一葉」が「二韻一葉」、「六韻一葉」が「五韻一葉」になっていることを紹介する。月舟は『古賦辯對』を見たことがないが、ある本に書いてあったという。

月舟は「叶韻」を考察するに際して、『毛詩』の例を取り上げる。

叶韻、毛詩有其例。八卷七月詩、七月流火、九月授衣。春日載陽、有鳴倉庚。女執懿筐、遵彼微行、爰求柔桑。春日遲遲、采芣<sub>シ</sub>析<sub>シ</sub>祈。女心傷悲。殆及公子同歸。三卷、君子偕老、副笄<sub>シ</sub>六珈。委委佗佗、如山如河。象服是宜（叶牛何反）。子之不淑、云如之何。十三卷北山詩、或燕燕居息、或盡

瘁事國、或息偃在床、或不已于行。

叶韻、毛詩に其の例有り。八卷「七月」詩に、七月流火あり、九月衣を授く。春日載て陽に、鳴く倉庚有り。女は懿筐を執り、彼の微行に遵ひて、爰に柔桑を求む。春日遲遅たり、藝を采ること祈祈たり。女心傷悲す。殆て公子と同じく帰がんと。三卷、君子と偕に老いん、副し筭し六珈す。委委佗佗として、山のごとく河のごとし。象服是れ宜し。子の不淑なる、云に之を如何、と。十三卷「北山」詩に、或は燕燕として居息し、或は盡瘁して國に事へ、或は息偃として床に在り、或は行に已まず、と。

ここでは「七月」詩を取り上げ、上声二〇咎韻（「火」）と上平四支韻（「遲」）と上平五微韻（「衣」「祈」「帰」）と下平七陽韻（「陽」「筐」「行」「桑」）と下平八庚韻（「庚」）が叶韻であることから、陽韻と微韻の關係を証する。「君子偕老」詩では、上声一九皓韻（「老」）と下平六麻韻（「珈」）と下平五歌韻（「佗」「河」「何」）と上平四支韻（「宜」）と入声一屋韻（「淑」）が叶韻であることを示す。「北山」詩では、入声一三職韻（「息」「国」）と下平七陽韻（「床」「行」）が叶韻であることを示す。これらを全て関連させて、「秋風辞」における支韻・微韻・陽韻・歌韻・職韻の字が叶韻に成りうることを証したかったのである。

「三韻一葉」と「六韻一葉」について、正宗龍統の説（後述の常庵秘本の首書の説）を引用し、自身の解釈を示す。

三韻一葉、或曰、…（常庵龍崇の説を引用）…。（正宗の説を引用）…。  
幻又謂、三韻一葉、謂婦芳忘三字一葉歟。六韻一葉、謂河波歌多何五字、与飛字一葉歟。蓋漁父辞押波字、作補悲切。謂之錯雜成章。

三韻一葉、或は曰く、…（常庵龍崇の説を引用）…。（正宗の説を引用）…。  
…。幻又た謂ふ、三韻一葉は、婦芳忘の三字一葉を謂ふか。六韻一葉は、河波歌多何の五字の、飛字と一葉なるを謂ふか。蓋し漁父辞に波字を押し、補

悲の切を作す。之を錯雜成章と謂ふ、と。

月舟は、「飛」「芳」「忘」を三韻一葉、「帰」「河」「波」「歌」「多」「何」を六韻一葉と考えている。その際に「漁父辞」でも「波」の字が叶韻として用いられているとし、「錯雜成章」は様々な場所で叶韻として用いられることをいうとする。

月舟の抄は、この後に河清祖瀏の解釈と桂林徳昌の解釈を引用している。

〈芳郷光隣か〉

芳郷光隣（？〜一五三六）は別号を愚島という。『東大十六冊本』にその名が見えることから『古文真宝』の抄を残していたようであるが、「秋風辞」に「芳」と出てくる人物が芳郷光隣であるか定かではない。

芳、注上注所謂三韻一葉ハ、微韻陽唐韻歌韻也。此三韻ハ、皆一韻ニ相叶也。故三韻一葉ニシテ可レ歌也。下注所謂六韻一葉ハ、六字誤也。必三字也。与上ノ三韻同也。

「三韻一葉」が微韻（「飛」「帰」）と陽唐韻（「芳」「忘」）と歌韻（「河」「波」「歌」「多」「何」）であり、この三韻が叶韻（協韻）だとする。そのため「六韻一葉」の「六」は「三」の誤りだとする。

〈常庵龍崇〉

常庵龍崇（一四七〇〜一五三六）は別号を角虎道人、寅闇という。正宗竜統に師事し、その法を嗣ぐと同時にその学芸も継承する。『古文真宝』の作品解釈についても正宗の影響を強く受けている。龍谷大学に常庵が称した『古文真宝抄』が残されている。

句解無韻叶之注。懶翁曰、六韻一本作九韻。又或曰、三韻之注誤在下。古今未詳。寅有一解。伝曰、前人未決之訟、後人之責也。前儒未判之疑、後

儒之責也。予謂、芳与忘為一韻、歌河与何又為一韻、是曰三韻一葉、曰六韻一葉、有何疑哉。錯雜指河歌何之三韻也。

句解に韻葉の注無し。懶翁曰く、六韻を一本九韻に作る、と。又た或は曰く、三韻の注誤りて下に在り、と。古今未だ詳かならず。實に一解有り。伝に曰く、前人の未だ決せざるの訟、後人の責なり。前儒の未だ判せざるの疑、後儒の責なり、と。予謂へらく、芳と忘と一韻を為し、歌河と何と又た一韻を為し、是れ三韻一葉と曰ひ、六韻一葉と曰ふは、何の疑ひか有らんや。錯雜は河歌何の三韻を指すなり、と。

常庵は、「芳」と「忘」を一韻、「歌」と「河」と「何」を一韻とすれば、「三韻一葉」と「六韻一葉」は問題ないとする。つまり、正宗の解釈にあつたように、「飛」と「帰」をそれぞれ一韻とみなして二韻とし、「芳」と「忘」の二字を一韻とみなし、合わせて三韻一葉とし、「河」と「歌」と「何」の三字を一韻とみなし、「波」の字を一韻とみなし、「多」の字を一韻とみなし、合わせて六韻一葉とする解釈である。

常庵は、『東大十六冊本』によると、次の解釈も参考にしたようである。

三韻一葉ト、六韻一葉ト、常庵和尚家傳ノ秘本ノ首書ニ云ク、飛次宮清音芳次宮忘次宮、三韻ノ中、飛一葉、ハヒフヘホ相通也。帰河歌波多何、六韻ノ中、帰一葉、カキクケコ相通。五ハ歌ノ韻、韻同、以叶韻解之。有三疑二可レ秘。

ここでは、「飛」「芳」「忘」がハヒフヘホに関連して通じるとして三韻一葉になり、「帰」「河」「波」「歌」「多」「何」がカキクケコに関連して通じ、しかも五字は歌韻に属するため、叶韻として六韻一葉になるといふ。正宗から聞いた説を自身の本に書き写したのであろう。

#### 〔河清祖瀾〕

河清祖瀾（生没年未詳）は別号を賀湖、頑雲、豚雲という。正宗龍統（蕭庵）より『古文真宝』の講義を聴く。『東大十六冊本』には次のようにある。

河清云、芳忘ノ二ハ同韻也。ハヒフヘホ、飛帰ハ同韻ナレドモ二韻ニ用也。芳忘ヲ一韻ニスレバ三韻一葉也。飛帰芳忘ノ四字之内、抽二一字一、撰二下ノ五韻一、六韻一葉也。不日芳忘ノ二字、悉曇ノ時大異也。下ノ五韻ニ撰スルナラバ、忘ノ字ヲ下ヘトルベキ歟。又常云、飛ト芳ト忘ト三韻一葉也。ハヒフヘホ通故也。ソノ時ハ帰ノ字ヲソク也。六韻一葉ハ、帰河波歌多何ノ六也。コレハ、カキクケコ通故也。

「芳」「忘」の二字を一韻とし、「飛」を一韻、「帰」を一韻として合わせて三韻としている。そして不二こと岐陽方秀の言であるうか、「芳」「忘」を悉曇（梵字の字母とそれが表す音声）に照らし合わせて異なることから、「忘」字を下の「河」「波」「歌」「多」「何」の五字と合わせて六韻一葉としている。河清の説は『東洋十冊本』にも引用されている。

三韻一葉、河清説。或云、抛休齋注義云、辞者兼詩与騷之声、而可歌也。然則欲説此辞者、先須明宮商角微羽之五音、本起於声成文。然後知音韻相叶、而曲調有節。

一、飛次宮清音 二、帰角清音 三、芳次宮清音忘次宮濁音  
四、河羽濁音何羽濁音 五、波宮清音 六、多微清音

私、河与何二字、共羽濁音韻、故合之為一。波字宮清音韻、已上三韻、前後各為三韻、故云六韻一葉、錯雜成章。歌字与帰、共角清音韻、故附之於上。今除之、若更數之、則可云七韻一葉。又一篇中有三宮音。波字為宮清音。飛字為次宮清音。芳忘二字、則芳數方切、次宮次清音。忘武方切、次宮次濁音。其音雖有小異、二字共在本韻、則各宜分清濁。今且接在他韻、則可称一方音一宮音一陽而已。云貴蘭、云賤蕙、較秋菊、則只是一般春香。三韻一葉、河清の説。或は云ふ、休齋の注義に拠りて云ふ、辞は詩と騷との

声を兼ね、歌ふべきなり。然れば則ち此の辞を読まんと欲する者は、先づ須く宮商角微羽の五音の、本より声より起こりて文を成すを明らかにすべし。然る後音韻の相叶ひ、曲調の節有るを知る。

- 一、飛次宮清音 二、帰歌角清音 三、芳次宮次清音「忘」次宮次濁音  
 四、河羽濁音「何」羽濁音 五、波宮清音 六、多微清音

私、河と何との二字は、共に羽濁音韻なれば、故に之を合して一と為す。波字は宮清音韻にして、已上の三韻、前後各おの三韻を為せば、故に六韻一葉、錯雑として章を成すと云ふ。歌字と帰とは、共に角清音韻なれば、故に之の上に附く。今之を除き、若し更に之を数ふれば、則ち七韻一葉と云ふべし。又た一篇の中に三宮音有り。波字は宮清音為り。飛字は次宮清音為り。芳忘の二字は、則ち芳は數方の切にして、次宮次清音なり。忘は武方の切にして、次宮次濁音なり。其の音小異有りと雖も、二字は共に本韻に在れば、則ち各おの宜しく清濁を分かつべし。今且つ接して他韻に在らば、則ち一方音一宮音一陽を称すべきのみ。貴蘭と云ひ、賤蕙と云ひ、秋菊に較ぶれば、則ち只だ是れ一般の春香なるのみ。

まず「辞」の特徴として、詩と騷の声調を兼ねて歌うことだとする休齋の注を挙げる。そこで「秋風辞」を読む時には音楽で使われる音高で表される宮商角微羽が、もともと声より発せられて文章を成立させていることを明らかにすれば、その後音韻が調和し、曲調に音節があることを知ることができるという。これによれば、「飛」が次宮清音で一音、「帰」「歌」が角清音で一音、「芳」の次宮次清音と「忘」の次宮次濁音が二字で一音、「河」「何」が羽濁音で一音、「波」が宮清音で一音、「多」が微清音で一音となり、同じ音韻が前後で入り交じって用いられているので、「六韻一葉、錯雑として章を成す」ということができるとする。「歌」字と「帰」字はともに角清音であるため「歌」字を前にもつてきて同韻としたが、これを解除すると「七音一葉」になる。また

作品中に「波」（宮清音）と「飛」（宮清音）と「芳」（次宮次清音）「忘」（次宮次濁音）の三つの宮音があり、中でも「芳」と「忘」は清濁の違いはあるが、共に同じ音に基づくとする。

〈彭叔守仙〉

彭叔守仙（一四九〇〜一五五五）は別号を瓢庵という。学芸に秀で、膨大な量の漢籍及びそれらの抄を書写・抜書したことで知られる。自らが抄した書も多く、『古文真宝後集』もその一つであり、その抄が版本として広く流布した。柳田征司氏が古活字版の『古文真宝抄』で「文英清韓力」とする抄は、私見に拠れば彭叔守仙の抄として誤らない。

注六韻一葉ト、前注ノ三韻一葉ト、何モ不審ナ事ナリ。句解ニ云、前四句係二兩句ノ換レ韻。後五句係二同韻ニ協レ音。自成ニ一体。三韻ノ三ノ字作ニ二字一可也。微韻ノ飛ト帰ト二韻也。又六韻ノ六ノ字作五字一可也。河波歌多何ノ五ナリ。如レ此字ノ誤ヲ改ムレハ無レ害ソ。東福ノ信仲ノ義ニハ：（信仲の説を引用）… 東山桂林翁ノ義ニハ、六ノ字ヲ九ノ字ニ作タ本ヲ近コロ見タト、…（桂林の説を引用）… 瓢カ謂六ノ字作九字トキハ易レ解トハ、飛ト帰ト芳ト忘ト河ト波ト歌ト多ト何トノ九字乎。

『古文句解』の何晦夫の注によれば、「三韻一葉」は「二韻一葉」とすべきであり、「六韻一葉」は「五韻一葉」とすべきだとする。桂林徳昌が言うように「六」を「九」とすべきとするならば、その九字は、「飛」「帰」「芳」「忘」「河」「波」「歌」「多」「何」かとする。

〈月溪聖澄〉

月溪聖澄（一五三六〜一六一五）は別号を江東、松下老衲という。十七歳の時、仁如集堯の『古文真宝』の講義を聴き、元龜三年（一五七二）に仁如の二

回目の講義を聴く。文禄四年（一五九五）から慶長十四年（一六〇九）に至るまで十五年間、古文真宝の講談を行う。『東大十六冊本』は月溪によって編集された。

月溪は多くの抄を編集する立場のため、「澄云、注ニアル三韻一葉ノコトハ、下ニ見タリ。」と、「三韻一葉」の解釈を「六韻一葉」とともに後に記したことを言う。そして、当該箇所では、「三韻一葉」が「忘」の下に置かれるが、以降の文章も兼ねてそこに置かれているという解釈を受け、次のように言う。

澄云、兼テ注シテ不能忘ト云処ニヲキタリト。ママヨ。奈老何ト云下ニアルト心得レバ、別ニ無妨者乎。

「不能忘」の下に置かれているが、「奈老何」の下にあると考えれば支障ないとする。

そして、万里集九の解釈で引用したように、「古詩十九首其八」で歌韻と支韻と微韻が協韻であることに對する補足説明をしている。

### 三、「三韻一葉」「六韻一葉」の妥当性について

以上のように、多くの禅僧が「三韻一葉」「六韻一葉」に對して様々な解釈を施している。では、それらの解釈の中で妥当な解釈は何れの解釈であろうか。

江戸時代においても『古文真宝』は多くの儒者達に愛読・玩賞された。最も著名な文人・林羅山（一五八三〜一六五七）は、随筆『梅村載筆』の中で次のように言う。

古文眞實秋風辭の註に、三韻一葉とあるは、微韻陽韻歌韻通ずるなり。末に六韻一葉とあるは、漁父の辭の註なるを、誤て秋風韻の下に置なり。漁父の庚韻、支韻、微韻、歌韻、灰韻、沃韻、合せて六韻一葉して、前後相まじへて文をなす也。古來より五山の僧種々にいへども信とするにたらず。

林羅山は、「三韻一葉」が「秋風辭」の注であり、「六韻一葉」が後の「漁父辭」の注であるとし、その証拠に「漁父辭」では庚韻、支韻、微韻、歌韻、灰韻、沃韻の字が混じって用いられているという。これは祖溪徳濬や桂林徳昌の解釈と同様である。羅山はこの解釈を自身が製した『古文後集諺解』の中に取り入れている。以後、『古文後集諺解』を端として江戸期の『古文真宝』の受容が深まっていく。現在、この羅山の解釈が最も信憑性の高い解釈として処遇されているといえよう。

林羅山は両注の置かれる位置が誤りであると断ずる立場であるが、両注の置かれた場所が変わらないとした時には、何れの解釈が妥当であろうか。「三韻一葉」は、「忘」の下に置かれ、微韻（「飛」「帰」と陽唐韻（「芳」「忘」）があるため「二韻一葉」とすべきであり、「六韻一葉」は、文末に置かれ、歌韻（「河」「波」「歌」「多」「何」）があるため「五韻一葉」とするべきであるとする解釈が、最も簡明、明快であると思われる。このことはかなりの禅僧が指摘するも、与えられた注本文を固く信用し、解釈に慎重になるあまり、「版刻の誤り」と断定する注者が現出してはいない。異国（本場）の文学作品に対する本朝文人（禅僧）の立場としては致し方のないことかもしれない。その点は、鸞岡省佐に尋ねられた明人・祝允明が「版刻の誤り」と断定しているのは貴重な資料といえよう。

両注が場所も変わらず、「版刻の誤り」すら無いとするならば、何れの解釈が妥当であろうか。禅僧の注者は、「叶韻」に関連する資料を取り上げたり、悉曇で考察したり、韻鏡の音韻に当てはめたりして苦闘しているが、何れも注が置かれている場所やその示している数に無理が生じ、現在のところ妥当と言える解釈はないといえよう。

### まとめ

禅林において、確認されるだけで仲方円伊・信仲以篤・天英周賢・清原業忠・華嶽建胃・天隱龍澤・了庵桂悟・桂林徳昌・正宗竜統・祖溪徳藩・万里集九・鸞岡省佐・一元光演・湖月信鏡・彦龍周興・笑雲清三・月舟寿桂・(芳郷光隣)・常庵龍崇・河清祖瀏・彭叔守仙・月溪聖澄等が『古文真宝』の講抄に従事していたことが窺われる。これほど多くの禅僧(除、清原業忠)が「三韻一葉」「六韻一葉」について、自身の解釈を提示したり、歴代の禅僧の解釈を補足説明している。『古文真宝』を講抄しながら、新奇な解釈ではなかった場合や、抄として書き残されなかった場合も含めると、『古文真宝』に精通していた学問僧の数はまだまだ膨れあがるであろう。それら師僧の下で多くの若年僧が『古文真宝』の習熟に励んでいたと考えれば、当期の『古文真宝』の浸透の範囲がいかに広大であったか、その理解度がいかに深いものであったかが察せられよう。

多くの禅僧が様々な解釈を提示していることについて、そこには歴代の学問の解釈にとらわれず、納得できるまで妥当な解釈を見出そうとする禅僧の学問修得に対する姿勢の凄まじさを見て取ることができる。鸞岡省佐のように中国に渡り、当地の知識人にその解を求めた者までいることが、そのことを象徴している。

それぞれの僧の解釈法を見ると、注の置かれた位置や、示されている数字の面、音韻の面を始めとして、何れの場合も必ずその論拠を示している。その博引旁証の解釈法は、当期の禅僧の解釈法の特徴であり、禅僧がいかに外集を広く、深く学んでいたかを垣間見ることができる。

『古文真宝』には多数の作品が収められており、それぞれの作品に歴代の禅僧が解釈を示している。今後、それらの作品解釈に逐一光を当てたいと考えている。

【注】

- ① 村上哲見「第七講 五山学僧の漢詩講義Ⅱ」(『中国文学と日本十二講』創文社 二〇一三) 参照。
- ② 柳田征司氏「抄物目録稿(原典漢籍集類の部)」(『訓点語と訓点資料』一一三号 二〇〇三年) に詳しい。
- ③ ②によれば、仁如集堯・月溪聖澄の講義を記した抄とされる。
- ④ 『古文真宝彦龍抄』(続抄物資料集成第五卷所収 清文堂 一九八〇) 参照。
- ⑤ 『古文真宝後集抄』(漢文叢書第十二冊 博文館 一九一四) 等参照。
- ⑥ 拙稿「鸞岡省佐『古文真宝不審』について―翻刻と本文解説―」(『愛媛大学教育学部紀要』第五〇巻 二〇一一) 参照。
- ⑦ 『古文真宝桂林抄』(続抄物資料集成第五卷所収 清文堂 一九八〇) 参照。